

村松友次編

都のつと

奥羽道記
はなひ草大全

古典文庫

村松友次編

都のつと

奥羽道記
はなひ草大全

古典文庫

平成七年六月二十五日印刷発行

非売品

編者 村松友次

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸舎

都のつと・奥羽道記
はなひ草大全

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座 〇〇一九〇—九一—四五九七番

目次

はじめに	三
一 釈宗久『都の土産』(詞林意行集本)	七
二 丸山可澄 ^{かちよう} 『奥羽道記』 ^{みちのき} (山形大学附属図書館蔵)	三五
三 『はなひ草大全』(寛文四年刊)	四二
解説	三一
(一) 釈宗久『都の土産』(『都のつと』について)	三三

- (一) 『都のつと』と『おくのはそ道』の表現・構想の類似
 — 扶桑拾葉集本『都のつと』翻刻と共に —……………三三〇
- (二) 丸山可澄^{かちよう}『奥羽道記』^{みちのき}について……………三六九
- (四) 『はなひ草大全』(寛文四年刊)について……………三六四

はじめに

本書には中世紀行文釈しゅうきやうもん宗久著『都のつと』二種類（共に版本）と、元禄四年光圀の命で奥羽の地を旅した彰考館員丸山可澄かちやう（運平）の『奥羽道記』みちのき（稿本）と、寛文四年刊『はなひ草大全』（版本）の四点を収める。ジャンルも時代もばらばらであるので、その収載の意図をここに簡単に述べる。

○

『都のつと』二点は元禄二年、三年に出版されたものである。両本間に小異があるので両本を収める。どちらも芭蕉が読んだ可能性があり、しかも、中世の他の紀行文が京都・鎌倉間あるいはせいぜい白河あたりまでであるのに対して『都のつと』は奥羽の地であり、芭蕉の関心を当然引いたであろう。それで一本（扶桑拾葉集本）については翻刻に並んでその行文と『おくのほそ道』の行文との関係点を検してみた。三十九箇所について影響が考えられる。これは翻刻だけではないので解説の部に入れる。

『奥羽道記』と『おくのほそ道』とは作品としては相互に関連はない。しかし芭蕉・曾良の東北旅行そのものと丸山可澄の旅とは微妙に関連が考えられる。たとえば「壺石文」（多賀城碑）のところに「……前方国主ヨリ写来候通ニテ少毛違ハ無之……」とある。前方は「まえかた」と読むか。以前、国主伊達綱村公から碑文を写しとったものを光圀公のところへ送って来てあり、可澄はそれを持って来て実際に碑面とつき合わせたのである。その結果「すこしもちがひはこれなく」と書いている。つまり伊達藩主綱村から碑文の正確な読みとりが報告されたのは元禄二年か三年のことで、不完全ながら元禄二年にこれを読みとった芭蕉・曾良の業績は先駆的だったことになる。そしてそれがただちに（『おくのほそ道』が出版されたのは元禄十五年）光圀や綱村の耳に入り、綱村は専門家を派遣して正確に読みとらせたのであろう。『おくのほそ道』の旅の後、芭蕉は三年ほど関西に滞在していた。この碑のことが彰考館員や光圀の耳に入ったのは曾良からであったはずである。

○

『はなひ草』は近世初期俳諧の流行と共に次々と増補し、改訂して出版された。しかし今日翻刻されているものは、森川昭氏による最初期に属する一本（解説、本書三九ページ参照）と、勝峰晋風氏による延宝六年（一六七八）刊行の『増補はなひ草』（日本俳書大系篇外『蕉門俳諧統集』所収）の二本のみである。この二本の間には約四十年のへだたりがある。この間に俳諧は急速に広く流行し、『はなひ草』は各種異本が次々と刊行された。本書に翻刻する『はなひ草大全』は右二本のほぼ中間に当って世に出たもので、『はなひ草』の変遷を知り得るものである。なお、解説（はなひ草大全）（本書三四ページ以下）に詳説する。

一

釈宗久そうきゆう

『都の土産ツト』

（『詞林意行集』本）

凡 例

一、元禄三年刊『詞林意行集』（静嘉堂文庫蔵）卷之一所収『都の土産』を翻刻する。

二、句点は原本のままつけた。読点は原本にない。

三、濁点は原本にあるもののみをすべてつけた。編者は一切つけない。

四、よみがな（すべてカタカナ）も原本にあるもののみをすべてつけた。編者は一切つけない。

五、丁移りを「」で示した。

六、異体字・旧字体は大体現在通行字体に改めた。

七、文中の宗久自作の和歌は上句と下句が改行になっているので、その通り翻刻した。

八、真下良祐君に翻字を担当してもらい、静嘉堂文庫より翻刻許可をいただいた。記して感謝する。

詞林意行集東方紀行卷之一

静嘉堂蔵書

都の土産

築紫宗久

觀應クシヨウのころ一人の世すてびとあり。みつから銀山ギンサン鉄壁テツヘキをとをるこゝろざしなしといへとも。いにしへ樹下ジュゲ石上セキシヤウをしめし跡をしたひて。何国イツクも一居キヨのすミかならねばと思ひなしつゝ。しらぬひのつくしをたち出しより。こゝかしこまよひありき侍しほどに。いさゝかするたよりありしかハ。大江山の雲にふし。生野イクノの原の露にやどりてさすらへ

侍」しほとに。丹波国はや山といふ所にゆきぬ。身をかくすべき宿とまではたのまねど。そのとしをばそこにてすごし侍りて。またの春やよひばかりに京へのほりて二三日侍りしほとに。清水北野ゝ宮などへまうでつゝ。それより東のかたへ修行スギヤウにおもひたち侍りき。また夜をこめて都を出。有明の月影東門の浪に移りて。鳴ナギのこれる鳥の声とを里のあとに聞えて。そこはかたなくかすみわたる空のけしきいとおもしろし。やかて相坂山をこゆ。杉の下道いまた木くらく関の岩かとふみならずもたとくしきほと。都のかたいつしかへだゝり行も三千ミチ里サトの外の心地して。ふるさとを別しよりも猶こゝろとまり侍りしにや。その日石山につやし侍りても一すちに無上菩提心のねがひをいのり申き。あはれ下向の人にともなひて日出るほとに志賀の浦をすく。こき

行舟の跡はるかに見わたされて。かの満誓沙^{マンセイ}」弥かなにゝたとへんと
詠ける風情もこゝろにうかひ侍り。ひえの山れうごむの先徳。和哥ハ
けるむのもてあそひなりとてとゝめられけるか。あるとき恵心院^{エシン}にて
曙^{アケボウ}に湖水を見渡しておハしけるに。沖^{ヲキ}に舟のゆくを見て人の此哥を
詠吟しけるを聞給ひて。観念の助縁^{ジョエン}となるべかりけりとて。そのゝち
二十八品極樂の哥などおほくよまれけるとぞ申伝へ侍る。さもやとお
ほえ侍り。かゝみ山をすぐるとても墨染にあらた」むるわかおもかけ
もはゝかりある心地して。いさたちよりてともおほえ侍らす

たちよりて見つとかたるなかゝみやま

なをよにとめん影もうければ

さて東のたひの日かすもやう／＼つもり行は。名たかき所と不破^{フハ}の関

なるミかたたかし山ふたむら山うち過てさやの中山にもなりぬ。かの西行またこゆへしとおもひきやとよめるもあはれに思ひあはせられぬ。さやの中山さよの中」山なといふ説のあるにや。中納言師仲卿^{モロオカ}当国の任^シにて下られけるに。土民さよの中山と申侍りけるとて。中山の先達などもさやうによまれけるにや撰集にも見をよふ心地して侍りし。源三位頼政^{ヨリマサ}ハ長山^{ナガ}とぞ申ける。このたび老翁^{ラウヨウ}のありしにたつね侍たりしかハ。ことやうもなくさやの中山とこたへ侍りき

こゝハまたいつこととへはやまひこの

こたふるこゑもさやの中やま」

やかてするか国宇津の山をこゆ。薦^{ツタ}の下道もいまた若葉のほとにて紅葉の秋思ひやられ侍り。

紅葉せは夢とやならむうつこのやま

うつゝに見つるつたの青葉も

清見か関にとまりて。また夜ふかく出待るとておもひつゝけ侍りし
清見かた波のとさしもあけてゆく

月をはいかに夜半のせきもり

たゝぬ日もなしと聞いたこの浦波にも」たびの衣手ハいつとなくしほ
れかちなり。富士の山を見わたせはいとふかく霞こめてときしらぬ山
ともさらに見えす。朝日の影に高根の雪なをあさやかに見えて。かゝ
みをかけたるやうなり筆にもをよひかたし

時しらぬ名をさへこめてかすむなり

ふしの高根のはるのあけほの

ふしのねのけふりのすゑハたえにしを

ふりける雪やきえせさるらん

それよりうき島かはらをすき箱根にまうづけに権現のあらたなる御ち
かひならずハ。此山のいたゝきにかゝる水あるへしともおほえすいと
不思議なり。このところをはこの世なからのめいと申傳へたるにや。
所のさまもなべてにハかはりたる事ともおほかりし。いつとなく浪風
あれていとすさましく見ゆ

はこね路やミつうみあるゝ山かせに

あけやらぬ夜のうさそしらるゝ」

さてさかミの国鎌倉^{カク}山のうちと云所に行つきていにしへゆかりある人
をたつねしに。むかし語^{カク}になりぬときゝしかバ。はやう住ける所の